

地域社会活動に対する青年層の参加動機に関する研究*

A study on participating motivation over community activity of young generation *

久 隆浩**・高木 智史***

By Takahiro HISA**・Satoshi TAKAGI***

1. はじめに

近年、全国各地で、都市計画マスタープラン等の計画策定過程への参画、市民を対象としたまちづくり講座、市民主体による NPO 活動など、さまざまな活動への市民参加が活発化している。たしかに活動自体は活発化してきているものの、活動の参加者には偏りが見られる。特に、現状では青年世代の参加が少ないということが課題として挙げられる。活動組織を担っているメンバーも青年世代の力やアイデアを欲しているが、なかなか参加は進んではいない。そこで、論文では、ヒアリング調査によって、社会心理学における動機づけ理論にもとづき、すでに活動に参加している青年世代の参加・活動動機を調査、分析することによって、どのようにすれば地域社会活動に青年世代の参加を促進することができるかについて考察を行なう。

『大辞林』によると「青年」とは「14、15 歳から 24、25 歳頃までをいうが広く 30 代をも含めている場合もある」と定義されている。町内会などの青年部では 30 歳代までを有資格としている場合もあり、そこで本研究では調査対象を「14 歳～39 歳」とし、地域社会活動にすでに参加している 9 人を対象にヒアリング調査を行った。調査期間は 2005 年 11 月 29 日～2005 年 12 月 21 日である。

2. 活動の内容と誘発要因

ヒアリングの内容を、次頁に示すデータシートに整理し、分析を行った。活動の内容と誘発要因を以下に示す。

人物 A

A は、A-1 と A-2 の 2 つの活動に参加している。

活動 A-1

A の活動は A-1 から始まった。参加の契機は、子ども会から男女ひとりずつ代表で参加しなければならず、く

*キーワード：市民参加、意識調査分析、地区計画、計画基礎論

**正員、工博、近畿大学理工学部社会環境工学科

(大阪府東大阪市小若江 3-4-1、TEL06-6730-5880(内)4268、

FAX06-6730-1320、E-mail/ hisa@civileng.kindai.ac.jp)

***正員、修士(工学)、東大阪市府役所

じ引きで選ばれたものである。活動 A-1 は、活動を通して、地域子どもたちをリーダーとして育てていくことを目的としたものである。この活動の組織の特徴は、上部組織と下部組織の二段階で構成されていることである。下部組織の活動を展開することを通じて上部組織の活動に移行する構造が存在している。A も、当初はこれといった動機を持って活動に参加し始めたわけではないが、活動することによって内発的動機づけを高め、下部組織での経験からスムーズに上部組織へと移行することができている。内発的動機づけが促進された動機として、魅力的な先輩の存在を挙げている。

活動 A-2

活動 A-2 の活動は、活動 A-1 の活動とほぼ同じで、活動を通じて地域子どもたちを教育していくことを目的としている。この活動は活動 A-1 と同じ市内に存在する他の 3 団体と共同で活動し、活動 A-1 に参加し始めると自動的に参加をすることになっている。A は参加当初はこれといった動機を持っていたわけではないが、活動の目的が活動 A-1 とほぼ同じであったために、抵抗なく活動に参加できている。活動を通じることによって、「子どもとふれあうこと」や「指導していくこと」に楽しみを感じるようになり、内発的動機づけを促進させている。活動の目的と本人の目的が一致しているときには、内発的動機づけの促進が円滑に行わるのではないかと考えられる。

人物 B

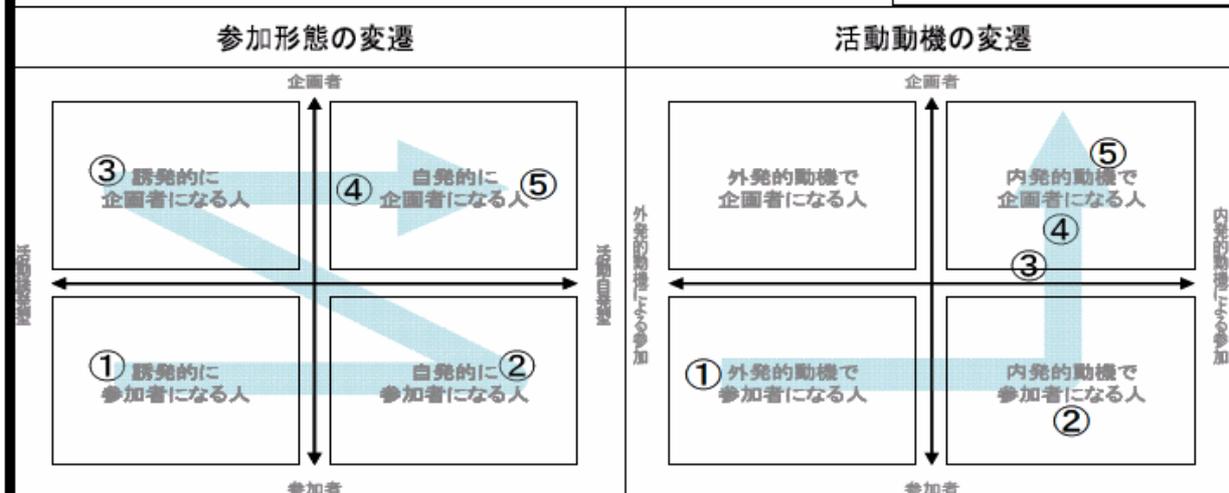
B は、B-1 と B-2 の 2 つの活動に参加している。

活動 B-1

B が活動 B-1 に参加した契機は、友人の誘いである。B によると、活動 B-1 は地域の小学生にサッカーを教えることを目的の重点においているとしているが、B 自身はあまり深くかかわっておらず、どのような人が発起人となっているかなど、詳しい情報を知ることはできなかった。友人からの誘いに、「楽しそう」、「自分で考えていろいろ活動したい」という内発的な動機づけが働いて参加を決めた。ところが実際に活動を始めると、人に使われることが多かったり、自分の意見や考えで活動

A-1

活動団体概要	参加開始時期
祭りに参加したり、子ども会のリーダー活動をしたりして、青少年指導者を育成することを目指し、育成する。 地域の子どもたちをリーダーとして育てていくことを目的としている。 ジュニアリーダーに所属している小5の子どもをミドルリーダーに所属している中学生以上が指導・教育していく。 (ジュニアリーダークラブはミドルリーダークラブの下部組織。ミドルリーダークラブ活動の見習いとして活動する)	ジュニア: 小学5年生 ミドル: 中学1年生
	参加終了時期
	現在も活動中



始めたきっかけ

① ジュニアリーダークラブに参加
 東大阪市内の各子ども会から男女ひとりずつ代表で参加しなければならず、その時にくじ引きで選ばれた

③ ミドルリーダークラブに参加
 ジュニアリーダーに参加していた人が中学生に進学すると、ミドルリーダーに参加するかどうか尋ねられる

意識の変遷

▼動機内容
 ▼動機名を示す

① はじめの想い
 ▼何も知らない状態で放り込まれたし、小5だったので深くは考えていなかった
 ▼(無動機) (外発)

①→②: 野外キャンプ等の活動を面白く感じていた。指導してくれた先輩が面白かった。
 ▼野外キャンプ等の活動が楽しかった
 ▼(遊戯動機) (内発)

②→③: ジュニアリーダーでの活動が楽しかった。また、指導してくれた先輩たちと一緒に活動していきたいと思うようになった。
 ▼先輩たちと一緒に活動していきたいと思った
 ▼(尊敬・親和動機) (内発)

▼ジュニアリーダーでの活動が楽しかったから
 ▼(継続動機) (内発)

③→④: 高校生になった時に、状況が変化した。先輩たちが抜け、後輩も入ってこなくなっていたので活動について全て自分が中心になってやっていかなくてはならなくなった。
 ▼自分の責任が増えてやらざるを得なくなった
 ▼(秩序動機) (外発)

▼子どもとふれあうことが好きになった
 ▼(成長動機・変化動機) (内発)

▼後輩たちと協力して活動を運営してきた
 ▼(親和動機) (内発)

▼どのようにしたら子どもたちが喜んでくれるかを考えるようになった
 ▼(成長・変化・理解動機) (内発)

④→⑤: 現在はさらに上の階級になり、後輩たちが主体でやっている。自分は何かあったときのサポート役。
 ▼自分の考えなかったアイデアを知ることが出来る
 ▼(理解・成長動機) (内発)

▼現在の子ども達の趣向を知ることが出来る
 ▼(理解・成長動機) (内発)

を行なっていけないという出来事に遭遇し、もっと積極的に自分から活動に携わりたいという想いを抱き、活動から脱退している。自己決定感の欠如により活動の動機を衰退させてしまう一例と捉えることができる。

活動 B-2

活動 B-2 は、野外活動を通じて青年と小学生の社会性を養い、育成していくことを目的としている。B は、以前活動していた活動 B-1 での経験から、何か子どもとふれあえるような活動をしていきたいと思っており、自分自身でそのような活動を探し出し、この活動に参加し始めた。活動を通じて「子どもたちが喜んでくれたこと」のように達成感を得ることにより、これからもより活動していきたいという想いが引き起こされている。

人物 C

人物 C は活動 C-1 に参加している。

活動 C-1

C が活動 C-1 に参加した契機は、友人から誘われたことである。楽器をやりたいと思っているところに、友人の友人が活動しているという話を聞いて、つてを通じて参加することになった。活動 C-1 は、老人ホームや障害者施設などの福祉施設に赴き音楽療法をすることを目的としている。C は、どこかで自分が楽器の演奏できる場がないかと求めていたところに、知人から活動について紹介され誘発的に参加し始めた。当初は活動組織の目的とは異なり、「楽器演奏ができるなら」という外発的な動機づけによって参加をしていた。しかし、活動を通じることによって、「演奏による聴衆の無反応さを感じ」、「自分が演奏して楽しむこと」から「聴衆を楽しませたい」という意識へと変容していった。またそのためには「どのようなことをすればよいのか」についても考えるようになり、内発的な動機づけの促進が見られた。

人物 D

D は活動 D-1 に参加している。

活動 D-1

活動 D-1 は、活動を通じて地域に還元するというよりも、活動に入ってくる子どもの人間性・自主性を伸ばそうと教育することを目的としている。この活動は活動 A-1 と同様、下部組織と上部組織の二段構えになっている。D が活動をはじめることになったきっかけは、「親が勝手に申し込み知らない間に参加することになっていた」という半強制的なものであり、当初は活動に対する想いも特段持っていない。しかし、「班の班長に任命され、後輩に対していろいろ教えていく立場になった」ことなどから当人の内発的な動機づけは促進されていった。下部組織での活動で楽しみを感じたため、上部組織

で仲間とともに活動していきたいと思い、上部組織に携わるようになった。ところが仲間がみんな辞めてしまい、知らない人ばかりのところでは楽しさを見出すことができずに活動をやめることになった。このことから、D にとっては仲間と活動していきたいという想いが、活動そのものに対する想いよりも強く働いたことが読み取れる。

人物 E

E は E-1、E-2、E-3 の 3 つの活動に参加している。

活動 E-1

活動 E-1 は、明確な目的を持った組織ではないが中心市街地を元気にしていきたいという想いで活動しているものである。E は当初、具体的に何かをどうしたいと思っていた訳ではなく、活動の内容に興味を持っていたために活動をしたいと思い、自分からニュースレターを見付け、参加していった。E の特徴として、このように自分の興味のある活動に自ら積極的にかかわっていきこうとする積極性がみられた。当初は興味本位で活動に携わっていたが、活動を通じて「一緒に活動する仲間に出会い、活動できたこと」により内発的な動機が促進されている。現在は、これからの活動のあり方についても自分なりのビジョンを持っている。

活動 E-2

活動 E-2 は、公募で選ばれた市民同士が市の総合計画のビジョンを話し合っ決めていくことを目的としている。E が活動をはじめることになったきっかけは、市の広報で総合計画策定委員を募集しているのを見つて、興味があったために応募し、参加することにした。当初はこれがしたいというような想いは持ってはあらず、どちらかというと、どのようにして総合計画を策定するのか知りたいという外発的な想いで参加をしていた。活動に携わっていくにつれて、面白い総合計画を作りたいと思い、まちについて勉強した。そのことにより E の動機は、総合計画を策定することによる達成感やまちの変化を感じたいという内発的なものに変容している。

活動 E-3

活動 E-3 は、活動 E-2 で策定した総合計画を、策定しただけで終わらずにその運営を見守っていくことを目的としている。しかし、まだ具体的にどのようなことを行うのかは決まっていない。E がこの活動を始めたきっかけは、総合計画策定委員を終わった後に案内の手紙が来たことによる。その誘いに、「策定しても終わりじゃない」というところに共感して参加している。

人物 F

F は活動 F-1 に参加している。

活動 F-1

活動 F-1 は、活動 A-1 と同じ活動であり、活動を通して、地域の子どもたちをリーダーとして育てていくことを目的としたものである。F がこの活動を始めたきっかけは、知らない間に町内会長が参加者として記入して提出していたことである。自発的なものでなかったためか、当初、活動に対してあまり深くは考えていなかった。しかし活動を通じて、「イベントがうまくいかなかったこと」、「自分の苦手なところでは友人にはかなわなかったこと」、「尊敬できる人ができたこと」の出来事から内発的な動機が生み出されている。また、活動における自分の役割を把握し、活動が滞りなく行えるように意識しているところが特徴的である。

人物 G

G は、活動 G-1 に参加している。

活動 G-1

活動 G-1 は、活動 A-1 と同じ活動であり、活動を通して、地域の子どもたちをリーダーとして育てていくことを目的としたものである。G がこの活動を始めたきっかけは、知人から活動に関する情報を受け取り、楽しそうだから参加してみようと思ったことである。当初は漠然と楽しみを求めていただけであったが、活動を通じることによって、自然にふれることの楽しさや活動自体の楽しさを感じるようになっていく。そしてこれらの経験を多くの人に感じてもらいたいという想いが読み取れる。また、F と同様に活動における自分の役割を把握し、自分の出来ることをすることによって活動をスムーズに行えるように意識している特徴もみることができた。

人物 H

H は、活動 H-1 に参加している。

活動 H - 1

活動 H-1 も、活動 A-1 と同じ活動であり、活動を通して、地域の子どもたちをリーダーとして育てていくことを目的としたものである。H がこの活動を始めたきっかけは、推薦により勝手に入れられていたことによるものである。このように H は誘発的に活動に参加しているため、参加当初の想いは、「友人をつくりたい」、「楽しみたい」といったもので、具体的に活動への想いは持っていなかった。しかし活動を通じて、「イベントに失敗したこと」、「尊敬する人ができたこと」、の出来事から内発的な動機が生み出されている。

人物 I

I は、活動 I-1 に参加している。

活動 I-1

活動 I-1 は、ソフトボールを通じてまちの子どもたち

の交流を深めることを目的に行われている。I がこの活動を始めたきっかけは、自分の住んでいる地区のチームに入っている友人から誘われ、参加することにしたものである。参加当初は、「楽しみたい」、「真剣に試合をしてみたい」という想いで活動に参加していた。そして「補欠で試合に出られなかったこと」、「自分の所属していたチームが強いほうであったこと」、がきっかけになり、より上手になりたい、負けたくないという想いが引き起こされている。

3. まとめ

調査結果をまとめると、今回の調査では、青年世代が地域社会活動に携わる際の動機として、勝手に他人が参加申し込みをした、友人の誘い、というように外発的動機づけが多くみられた。しかし、外発的動機づけだけでは活動の継続はむずかしいと考えられるが、活動を通じて内発的動機づけを獲得・促進することができることがあきらかとなった。

調査では、内発的動機づけを促進する出来事として、「活動をすることによって何か自分の成長につながるものがあると感じられること」、「活動を行うことによって自分に達成感を得ることができること」、「活動をすることによって、自分ないしは何らかの変化を感じることができること」といった活動の達成感や、「自分にとって尊敬できる人の存在」「過去に失敗を経験し、次に活かすことのできる機会があること」が挙げられていた。

以上の結果より、活動に携わっている青年世代は、自分の成長・活動の達成感・現状からの変化を期待しており、自分にとって尊敬できる人の存在・過去に失敗を経験すること・活動の達成感を得る出来事・活動を通じて楽しさを感じる可以由って内発的動機づけを強めていることがあきらかになった。つまりこれらのことから、当初は外発的動機づけによって活動している人や、特に何をしたいかという思いを持っていない人に対して、を感じられるような環境やしきみを整えることによって、その人の内発的動機づけは促進されることがいえる。

これらを通じて青年世代の地域社会活動への参加を促進させるための条件として、以下のものが考えられる。

活動当初は役割や責任を軽いものに限定し、参加するにあたって負担を感じさせないようにすること

活動したいと思わせられるように、活動のおもしろさ・やりがいを積極的に伝えていくこと

活動を通じて何か得られるものがあること、またはやりがいや楽しさを感じることを伝えていくこと

比較的年齢に近い人に尊敬できる人をつくること